



短編映画「特攻戦士神風／神様の縁結び」

空想靈武劇 鬼神童女遊俠伝外伝

「特攻戦士神風／神様の縁結び」

民富田智明



○粗筋

広域暴力団関東脅征会の構成員白馬王子は、少女を誘拐し、強姦ビデオ「お姫様ごっこ」の撮影をして、殺害していた。武州西部入間地方に住む元運転手現警備員の独身男性入間原堅次郎は、最高神に位置づけられる武州総鎮守を務める鬼姫山のお凜様が守護神として心中示現しており、その強い信心から、悪党退治のための白衣の英雄「特攻戦士神風」に変身する力を授かっていた。お凜様は、休みの日に、堅次郎を山に連れ出して修行を課していた。その日も、いつものように山に出かけた。一方、同じ入間地方に住む高校生の春小路清子は、少女漫画が好きで、部屋で漫画を描いていた。お姫様願望が強く、白馬の王子様との恋愛に憧れていたが、恋人ができたことはなかった。清子は、いつも通り家を出て学校に向かい、途中にある神社に「白馬の王子

と出会いたい」という手紙を添えて、縁結びを祈願した。

その時、事件は起こった。白馬の王子が自宅に侵入して両親を「祝福者」として誘拐した上で、少女漫画の謎の美男子のような雰囲気です。王子は清子たちを山に連れ去った。

堅次郎は、お凜様の霊的指導の下、山の中で様々な修行に取り組み、終えてから周辺の散策に繰り出した。

だが、王子と六人の騎士団が清子を囲んで「お姫様ごっこ」をしている現場にたまたま居合わせてしまった。堅次郎は、清子を救出するために「神風」に変身した。堅次郎は、圧倒的に不利な状況で奮戦するが、拘束されて拷問を受けたり、逃走のどさくさで両親を殺害されたりと、多大な被害を受けた。だが、目の前の清子を救いたいという気持ちと、両親の仇討ち、過去の犠牲者の無念の清





短編映画「特攻戦士神風／神様の縁結び」

算などの義憤によって、王子と壮絶な一騎打ちを繰り広げた末に倒した。
清子は、堅次郎こそが「自分にとっての本当の白馬の王子様」と受け入れ、結ばれた。
後に、恋愛活劇漫画「特攻戦士神風」を描き上げた。

に基づいた活劇漫画「特攻戦士神風」を描
 き下ろす。後にお凜様と神人同化すること
 になる。
 清子の父（60）

名は正隆。平安時代から続くとされる城持
 ちでもあった名門武家「春小路家」の第二
 十九代当主。家督を継いでいるが、形式的
 なもので、一般的な職業に就いている。給
 料は安い。家伝の武芸と家宝の刀を大事に
 している。時代が時代なら武将なのだが、
 戦いを好む性格ではない。根っからの映画
 少年で、かつては「武州のロジャー・ムー
 ア」と呼ばれていた。ちなみに全く似てい
 ない。「007／黄金銃を持つ男」が大好
 き。清子に武芸を仕込んで女武芸者映画を
 撮るといふ夢があり、脚本も書き溜めてい
 たが、清子が武芸に興味を持たないので諦
 めている。女子高校生と大恋愛の末に結婚
 したので、歳の差婚には偏見がない。白馬
 の王子に誘拐され、逃走のどさくさで王子



に挑んだが殺害される。

清子の母（40）

若妻。勉強にうるさい。夫とは高校生の頃に知り合っており、清い交際を経て、卒業後に結婚して清子を出産。歳の差婚には偏見がない。白馬の王子に誘拐され、逃走のどさくさで毒弾を受けて観念し、夫の仇討ちを挑んだが殺害される。

白馬王子（40）

広域暴力団関東脅征会の構成員で白馬組の組長。雰囲気美男子で、白の背広を着て、白の車に乗っている。闇の世界の芸術家を自称し、少女強姦ビデオ「お姫様ごっこ」の制作をしている。対象は小学生から高校生まですべて幅広い。

騎士団（30～35）

白馬組の構成員で、王子の舎弟。少女に接近するため小奇麗な身なりをしているが、目つきは悪い。



ジミー（40）

「お姫様ごっこ」の密売人。世界中の悪い金持ちに闇の販路を確保している。外国人のような呼称を使い、金髪に色黒肌という風貌をしているが、日本人である。

鬼姫山のお凜様（声）（9）

神号は「花吹雪凜凜志乃大鬼姫神様（はなふぶきりりしのおおにひめのかみさま）」。通称は「花吹雪のお凜」。堅次郎に心中示現した守護神。武州秩父の鬼姫山に住んでいる。武州総鎮守であり、

転じて、日本総鎮守、世界総鎮守でもある。別称「武州の鬼神童女」。地獄の刑罰を司る獄卒鬼の頭領で、実は極楽浄土を仕切る観音菩薩と勢至菩薩の化身分身。つまり、阿弥陀如来の化身分身でもある。宇宙の根源である大日如来の化身分身ともされ、諸神話にて語られる最高神と同一の存在ともされる。観音菩薩の性質が強く前面





に出しており、容貌や体格を自由自在に変化でき、救いを求める者にとって最も相応しい姿をして現れる。普段は「救済」に通じる「9歳」の姿をしている。本質的には「仏」だが、表面的には「神」なので、飲酒も肉食もする。堅次郎に託宣を下して「特攻戦士神風」に変身する力を授けた。

犠牲者の少女（9）

小学生。

白馬の王子に「お姫様ごっこ」の被写体として誘拐され、強姦されて殺害される。



短編映画「特攻戦士神風／神様の縁結び」

○少女の夢

白馬の王子が騎士団に祝福されてお姫様に求愛している様子の絵。

幼い少女（声）「私ね、大きくなったら、お

姫様になって、白馬に乗った王子様と結婚

するの……」

○どこかの山の中

三脚に固定されたビデオカメラが録画中になっている。

セーラー服を着た少女（9）が、強

姦され尽して気を失いかけている。少

女の胸には「お姫様ごっこ」と書かれ

たカードが置かれている。

少女「あ……ああ……ああ……」

少女の周りには、白い背広を着た雰囲気

気美男子・白馬王子（40）と、六人

の舎弟たち・騎士団（30〜35）が

立っていて、残忍な笑みを浮かべてい

る。



王子たちが少女を囲んで記念写真を撮る。

王子が拳銃を抜き、騎士団が短刀を抜く。

王子「主よ、姫の愛欲の果ての汚らわしき姿をお許してください。この白馬の王子が、姫の犯した罪を清めます。アーメン」

王子が少女の胴体に銃撃する。

騎士団が少女の胴体に短刀を突き刺していく。

少女は絶命して血まみれの無残な姿になり果てる。

王子たちは、少女を穴に入れて、埋める。

○街の駐車場

一台の車が停まっています、外国人風の怪しい男・ジミー（40）が一人で立っている。

そこに、一台の白い車が走ってきて、

停まる。

白い車の中から、王子が降りてくる。

王子「ジミーさん、お世話様です」

ジミー「おう、白馬の王子、待ってたよ」

王子「今回はなかなか上物の『姫』が手に入りました」

王子がポケットから『お姫様ごっこ』

と書かれたメモと、SDカードと、

セーラー服を着た少女の顔写真と全身

写真と強姦写真が入った透明な袋を取

り出してジミーに渡す。

ジミー「確かに上物だ。アレが反応するぜ」

ジミーが王子にアタッシュケースを渡す。

王子がケースを開ける。

ケースの中には、大量の札束が入っている。

ジミー「『姫』の需要は尽きない。国境を超

えて愛される」

王子「きつと『姫』も幸せでしょう。最も美





しい姿で永く使ってもらえますから」

王子とジミーが残忍な笑みを浮かべる。

王子がジミーと別れて、車に乗って走っていく。

○ 絵巻物

白衣の英雄『特攻戦士神風』に討伐される悪者の因果応報の末路が描かれている。

語り「人間界には、神仏を畏れ敬わず、法を破り、悪事に手を染めて善良な民を傷つける者どもがいる。地獄の刑罰を司る最高神である鬼姫山のお凜様は、世にはびこる悪者を駆逐するために託宣を下し、白衣の英雄を選定される。その白衣の英雄を『特攻戦士神風』という」

○ 題字挿入

開幕主題歌『特攻戦士神風』



入間原堅次郎（40）が変身した特攻戦士神風が悪者を蹴散らす雄姿が写し出される。

○ 堅次郎の夢の中

見えない敵『奴』との対決の記憶の断片が甦る。（前作「見えない敵の呪い」）

○ 堅次郎の自宅・居間

部屋の一角に、この世の中心にして真実である鬼姫山三神を祀った祭壇が安置されている。祭壇以外は、お膳や床が書類などで散らかっている。万年床と化した布団に堅次郎が寝ている。守護神かつ内在神である鬼姫山のお凜様（花吹雪凜凜志乃大鬼姫神様）が、堅次郎の心に語りかけてくる。



お凜様（声）「兄い、起きるんじゃ」

堅次郎「疲れているんだ。もう少し寝かせてくれよ」

お凜様（声）「シャツとせい。早う支度して山に出かけるぞ」

堅次郎「今日はいいよ」

お凜様（声）「だめじゃ。兄いは特攻戦士神風になったんじゃぞ。修行を欠いてはならんのだ」

堅次郎「わかった。起きるって」

堅次郎が布団から飛び出る。

○ 堅次郎の自宅・洗面所

顔を洗って、歯を磨き、髭を剃り、寝癖を整える。

○ 堅次郎の自宅・台所

炊飯器の中身を確認し、冷蔵庫の中身を確認する。卵と昨晚の肉野菜炒めの残りを取り出し、焼き肉のたれと醤油

を取り出す。

フライパンに火をかけて油を入れ、熱
くなったら卵を入れて、ご飯を放り込
む。そこに残り物の肉野菜炒めを突っ
込んで、しゃもじで混ぜながら、調味
料を投下する。あっという間に、残り
物炒飯が出来上がる。
その炒飯を皿に盛りつけ、小鉢にヨ
グルトを入れて、コップに水を入れ
る。

○ 堅次郎の自宅・居間

朝食をお膳に置き、座って食べ始め
る。

お凜様（声） 「最近、料理が適当になっ
とるぞ。野菜をもっと取らんとだめじゃ」

堅次郎 「物価が高くて色々買えないんだよ」

お凜様（声） 「栄養不足で病になったらなん
にもならん。かえって高くつくぞ」

堅次郎 「わかってるって」





食べ終わる。

○ 堅次郎の自宅・台所

スポンジに洗剤をつけて食器を洗う。
水切台のすぐ脇に置いてある大きい水筒を洗い、水を入れる。

○ 堅次郎の自宅・居間

水筒を床に置いてあるリュックの脇に置く。
洗濯しっ放しで床に置いてある普段着を手に取って、布団の上に適当に置く。
布団の上で部屋着を脱いで、普段着を着る。
リュックに運動着と汗拭きタオルを突っ込み、水筒を挿す。

○ 堅次郎の自宅・便所

紙を引き出す音。水を流す音。



○ 郊外の道路

り、車が走り出します。運転席に乗り込む。エンジンがかか

荷室にリュックを置いて、閉める。

堅次郎が来て、車の荷室を開ける。

○ 堅次郎の自宅・車庫

堅次郎が出てきて車庫に向かう。

一般的な一軒家。

○ 堅次郎の自宅の外

く。

靴を履き、扉を開けて、外に出ている。

○ 堅次郎の自宅・玄関

して、空調や火元を確認する。

リュックを背負い、帽子を被り、消灯

○ 堅次郎の自宅・居間



堅次郎の車が走っていく。

字幕 「武州入間地方」

○ 堅次郎の車の中

堅次郎が運転している。

お凜様（声） 「今日の修行はちょっと厳しめにいくぞ」

堅次郎 「何やるのさ」

お凜様（声） 「まずはいつも通り、準備体操と山中歩行じゃ。その後、変身動作の特訓をする」

堅次郎 「変身なんてなんでもいって言うってたじゃないか」

お凜様（声） 「なんでもええとは言うたが、兄いの変身は見栄えが悪いのじゃ。わしが神風に相応しい動作を仕込んじゃる」

堅次郎 「そんなことより戦いが強くなるようになりたいよ」

お凜様（声） 「戦闘技術は一朝一夕では完成できん。地道な修行の積み重ねじゃ。じゃ

が、変身動作なら一日特訓すれば完成できる。まずは神風の名に恥じぬ変身を身につけよ。変身さえ決まれば、格闘なんかできなくても鉄砲をバンバン撃ってりゃ立派な超級英雄に見えるぞ」

堅次郎「その辺合理的だな」

堅次郎がおもむろにラジオをつける。

ラジオ「ニュースをお伝えします。昨日の朝7時半頃、埼玉県坂戸市に住む9歳の女子小学生川村明美さんが、自宅を出て学校に向かったまま行方がわからなくなりました。警察では、何らかの事件に巻き込まれたものと見て捜査を進めています。埼玉県内では、過去にも登校中の女子生徒が行方不明になる事件が起きており、いまだに解決されています。警察では、組織的な営利誘拐の可能性を疑い、注意を喚起しています」

堅次郎「物騒だな」

お凜様（声）「これが本当に誘拐事件なら許





せん」

堅次郎 「けど、まだ何とも言えないな」

お凜様（声） 「目の前のことに集中せい」

堅次郎 「わかった」

堅次郎がラジオのチャンネルを変え

る。重厚な古典音楽が流れてくる。

音楽に身を委ねながら、車を運転し続

ける。

○郊外の道路

堅次郎の車が走っていく。

行く先には、雄大な秩父山地が広がっ

ている。

○街の遠景

無機質なビルが乱立している。

○街の駐車場

王子の車が停まっている。



○王子の車の中

なんだかよくわからないハードロック
音楽が流れている。

王子と騎士団が乗っている。騎士たちは
は小奇麗にしているが目つきは悪い。

王子の携帯電話が鳴る。

王子が音楽の音量を絞る。

王子「もしもし。ああ、ジミーさん、お世話
様です」

ジミー「この前の『姫』は最高だったよ。大
人気だ」

王子「ありがとうございます」

ジミー「早速だけど、次の『姫』をお願い
ね」

王子「ええ。すぐにでも」

ジミー「今度は、本物のお姫様がいいんだけ
ど」

王子「本物の？」

ジミー「武州西部の名門武家の血を引く『春
小路家』ってのがあるんだよ。そこの清

子って一人娘を頼む」

王子「時代が時代なら本物のお姫様ってわけですか」

ジミー「写真は送るから。よろしくね」

王子「楽しませてもらいます」

ジミー「そうそう、今回は趣向を変えて、

『姫』の両親も使ってみたい。どう使うかは任せるよ」

王子「わかりましたよ」

王子が通話を終わると、すぐに着信があり、写真を確認をする。

王子「まさしく『姫』だ。面白い」

王子の携帯電話に、盗撮された清子の写真が大きく表示されている。

○街の駐車場

王子の車が走り出す。

○街の道路

王子の車が走っていく。





○ 住宅地の遠景

平凡な一軒家が並んでいる。

○ 住宅地の道路

王子の車が走っていく。

○ 清子の自宅の前

一般的な一軒家。

『春小路』という表札がついている。

王子の車が近くに停まる。

○ 清子の自宅・部屋

髪の毛の長い可憐な少女・春小路清子（1

8）が部屋着で机に向かって少女漫画

の原稿を描いている。

自分自身を主人公に見立てた、理想の

白馬の王子様との恋物語。キラキラし

た世界。

扉を叩く音。



清子の母（声）「入るわよ」

清子「はい」

清子の母（40）が扉を開ける。

清子の母「清子、いつまで漫画描いてるの

よ。さっさと支度しなさい」

清子「わかってるから」

母が出ていく。

○清子の自宅・洗面所

清子が顔を洗い、歯を磨き、寝癖を整える。

○清子の自宅・部屋

クローゼットからセーラー服を出して、適当にベッドに置く。
部屋着を脱いで、学生服を着る。
姿鏡に向き合い、笑顔を作る。
スカートをひらひらさせて、愛らしく踊ってみる。

○清子の自宅・居間

清子の父（60）がランニングにパンツというラフすぎる格好で、伝家の宝刀を握って精神統一している。
天井や壁や家具に気を付けながら、刀の素振りをする。
ひとしきり素振りをした後、刀を鞘に納める。
扉が開き、清子が入ってくる。

清子 「おはよう」

父 「おはよう」

清子 「またそんな恰好で刀振ってる。体に当

たったら大怪我じゃ済まないよ」

父 「春小路の当主がそんな下手はしない」

清子 「せめてTシャツと短パンにして。お父

さんの下着姿なんか見苦しいだけなの」

父 「お前な、これでもお父さんは武州の口

ジャー・ムーアと呼ばれてだな」

清子 「誰それ？」

父 「ロジャー・ムーアを知らないのか？ 三



代目007だぞ。『黄金銃を持つ男』とか

最高だぞ。宿敵スカラマンガとの早撃ち対

決がかっこよくてな。シガレットケースと

ライターと万年筆で拳銃を組み立てるんだ

ぞ」

清子「知らないわそんなの」

父「『黄金銃』も知らないで男の子との恋愛

なんて描けないぞ」

清子「いつの時代の男の子よ。そんな少女漫

画見たことないわ」

父「それは少女漫画だからだ。本当の男の子

を描いてはいないからな。あんな男の子は

存在しない」

清子「少女漫画は女の子の夢よ」

父「少女漫画が好きなのはわかってるよ。け

ど、ランニングにパンツで刀振ってるのを

見て勝手に幻滅しないでくれ。武士なら禪

一丁で素振りしてなんぼなんだから」

清子「うちは武家の血筋かもしれないけど、

お父さんは殿様じゃないの。ただのおじさ



んよ。ロジャー・ムーアでも何でもいいけど、美男子でもないのに下着姿で居座らないで」

父 「美男子なら下着でもいいのか。それは差別だ」

そこに、母が台所から来る。

母 「はいはい。お父さんをいじるのもその辺で終わりにして。早く朝御飯食べちゃって。食べてないのあなただけなんだから」

清子 「はい」
お膳に清子の分だけ朝食が置いてある。ご飯と味噌汁と生野菜を添えた目玉焼き。
清子が鞆を適当に置いて座る。

清子 「いただきます」
清子が黙々と料理を食べる。

母 「お父さん、いつも言うけど、パンツ丸出しで家にいるのやめてね」

父 「ここは俺の家だぞ。どんな格好しようが勝手だろう。これが一番快適なんだ」



母 「あの子ども高校生なのよ。そういうだったら
ないところが気になるのよ」

父 「わかったよ。じゃあ、家の中でも常によ
そ行きの背広を着ることにする」

母 「そんな極端なことしなくても」

父 「小さい頃は毎日一緒にお風呂に入ってた
のに、最近は何んやかんやと俺にダメ出し
してくる。男なんてこんなもんだぞ。まっ
たく可愛くない」

母 「そう言わないで」

父 「本当なら、家伝の武芸を修得させて、清
子と女武芸者映画を撮りたかったんだ。脚
本も書き溜めてたんだぞ。生粋の映画少年
だからな。もうそれは諦めたけどな。お父
さんの好きなものを何もわかってくれてな
いのに、男の子との恋愛をどう描くんだ
よ。一番身近な男の子なのに」

母 「距離が近すぎるのよ。見たくないものま
で見えちゃうから」

清子が食べ終わる。





清子 「：：ごちそうさま」

母 「食器はそのままでもいいわよ」

清子 「はい」

清子が居間を出ていく。

○ 清子の自宅・便所

清子が入り、しばらくして、水を流して出てくる。

玄関に向かう。

○ 清子の自宅・玄関

清子が来て、清子が靴を履く。

清子 「行ってきます」

母 「行ってらっしゃい。気を付けてね」

清子が出ていく。

○ 清子の自宅の前

清子が出てきて走っていく。

○ 王子の車の中



王子が騎士たちに合図をする。王子と騎士たちが車を降りていく。

○清子の自宅・居間

清子の父が刀を振っている。

清子の母が入ってくる。

母「ねえ、あの子漫画ばかり描いてるの。

ちっとも勉強してないわ」

父「熱中できることがあるのはいいことだ」

母「このままじゃ進学に響くわ」

父「強制したところで勉強しないもんだ。俺

もそうだったしな。人のこと言えるほど立派でもない。今だから言えるが、進学のための受験なんて無駄だと思ってる。あの子は文系だしな、無試験で学費の安い通信制大学に入って、純粋に興味のある学問やっただ方がいいよ。完全独学だから時間はかかるかもしれないけど。受験勉強と学問ってまったく別物だから」

母「普通の大学に行かないと、就職とか不安



だし」

父 「経済難で子供の学費に苦勞している世帯
がかなり多いんだ。大学に入って学問やら
ずに遊んでいる学生も多い。それだった
ら、働きながら通信大学に在籍するという
考え方はありだと思ふ」

母 「高校生にもなって彼氏もないのに恋愛
漫画ばかりで、正直心配なの。漫画なんて
絵空事よ。本物の彼氏を見つければいいの
に」

父 「見つけたくて見つかるもんじゃないだろ
う。高校生の男なんてまだまだ幼いし、浮
ついた変な男に手出されるよりはましだ
よ」

母 「勉強の面倒見てくれる彼氏がいてくれた
らな」

父 「春小路の娘の相手なら、勉強だけじゃだ
めだ。まずは武芸を身に着けてもらわない
と」

母 「そんな人、滅多にいないわよ。面倒臭が



られるわ」

父 「まあ、そのうち相応しい男が現れるさ」

母 「そうだといいけど」

父 「俺がお前と知り合ったのがちょうど40

歳の時だ。まったく女の子との縁がなかつ

た俺に、17歳だったお前がついてきてく

れた。歳の差婚の偏見もある中でな。だか

ら、俺は、清子が選んだ相手なら何歳でも

いいと思ってる。これだけは言えるが、モ

テない男の方がいい。大事にするからな」

母 「女の子だって、モテない方がいいわよ。

この人のために可愛くなるうって頑張るも

の」

父 「今も若くて可愛いしな」

母 「あらあら」

ふと、ピンポンが鳴る。

母 「誰かしら」

母がインターフォンを確認する。

母 「はい」

王子（声） 「お届け物です」



母 「ちょっと待ってください」

父 「何か注文したか？」

母 「いいえ。あの子かしら」

父 「家計が厳しいんだ。勝手にあれこれ買われると困る」

母 「しょうがないわね」

父が玄関に向かう。母もついていく。

○清子の自宅・玄関

父が扉を開ける。

王子が立っている。

父 「届け物ってなんですか？」

王子 「これだよ」

王子が短刀を突きつける。

父 「これは一体……」

王子 「邪魔するぜ」

王子と死角に隠れていた騎士たちが押し入る。

騎士たちが短刀を突きつけて取り囲む。



母 「なんなの……」

王子 「娘を俺たちの『姫』に貰い受ける。娘の祝福のためについてきてもらおう。車に乗れ。近所には口止めをしてあるからな」

父と母は何もできない。

王子と騎士たちが父と母を連れていく。

○清子の自宅の前

王子と騎士たちが父と母を連れて出てくる。玄関に鍵をかけ、何事もなかったように車に向かう。

騎士たちが車の後部座席に父と母を押し込んで、挟むように乗り込む。王子が運転席に乗り込む。

車が走り出す。

○王子の車の中

王子が運転している。父と母が騎士たちに短刀を突きつけられている。

父 「娘に何する気だ！」

母 「手を出さないで！」

王子 「俺たちがどうしようとして、あんたらに關係のないことだ」

父 「大ありだ！」

母 「実の娘よ！」

王子 「春小路清子。武州西部の名門武家の血を引く一人娘。由緒正しきお姫様。地元の高校に通うが、不良連中からのいじめで不登校になり、現在は通信制高校に在籍中。普段は自宅学習で、週に何日か通学。少女漫画が好きで、勉強そっちのけで漫画ばかり描いている。成績は軒並み低空飛行。武家の娘なのに、武道に無関心なだけでなく、運動全般が大の苦手。学校での交流は少なく、友達はいない。恋愛脳な割りに、実際に彼氏ができたことはない。お姫様の割りには、出来が悪すぎるな」

父 「なんでそんなに知ってるんだ……」

母 「どうやって調べたの……」





王子「それを話す奴がいるか？」

父も母も口ごもる。

王子「名門武家の御館様と御方様とはいえ、

丸腰で刃物突き付けられちゃどうしようも

ねえ」

父母は何もできないでいる。

王子「しばらく眠ってな」

騎士たちが薬品漬けのハンカチを父と

母に押し当ててる。

父「うっ」

母「うっ」

父と母の意識が飛ぶ。

○住宅地の道路

王子の車が走っていく。

○神社の通り

清子が歩いていく。

○神社の鳥居の前



清子が通りかかる。

清子「あ、そうだ！」

鳥居をくぐって境内に入っていく。

○神社・境内

清子が社殿に向かう。

賽銭を入れて、鈴を鳴らし、鞆から一枚の紙を取り出す。

「素敵な白馬の王子様との出会いをください」と願い事が書かれている。

手を合わせて祈り、二礼二拍手一礼する。

清子が期待の笑みを浮かべて社殿を去っていく。

○神社の鳥居の前

清子が出てきて、歩いていく。

○神社の通り

清子が歩いていく。

○ 寂しめの通り

清子が歩いていく。

すると、王子の車が走ってきて横付けして停まる。

車から王子が出てくる。

王子が優しく微笑む。

清子が王子のイケメンオーラに取り憑かれて見惚れる。

王子「お迎えに上がりました、姫！」

清子「え？」

王子「私は白馬の王子。あなたを幸せにするため、お城にお連れします」

清子「あ、いや、その……」

清子の鼓動が高鳴る。

清子「いきなり、困ります……」

王子の微笑み。

清子がオロオロしている。

王子「私はあなたと出会うことが運命づけられていました。今の私にはあなたしか見え





ていません。あなたを見つめていると、心の奥底が熱く燃え上がるのです」

清子がオロオロしている。

王子「見ず知らずの私がいきなり愛を求めるのは戸惑うことでしょう。しかし、神の名の下で、赤い糸で結ばれているのです」

清子「そんなこと言われても……」

王子「さあ、お城にお連れします」

清子「あの、学校が……」

清子が後ずさりする。

王子「嫌とは言わせませんよ、姫」

王子が笑顔のまま短刀を抜いて清子に突きつける。

清子が絶句する。

騎士たちが短刀を抜いて車から降りてくる。

王子「彼らは私の忠実なる騎士団。拒めばどうなるか、わかっていますね？」

騎士たちが清子を取り囲む。

王子が短刀を突きつけながら、清子を



車の荷室に押し込む。そのまま運転席に乗り込んで、車を発進させる。

○ 郊外の道路

王子の車が走っていく。
行く先には、雄大な秩父山地が広がっている。

○ 山の遠景

秩父山地が間近にそびえ立っている。

字幕 「武州秩父地方」

○ 山間の道路

堅次郎の車が走っている。

○ 山の駐車場

堅次郎の車が入ってきて停まる。
堅次郎が降りてきて、荷室から運動着を取り出して、公衆便所に着替えに行く。



お凜様（声） 「着替えたらすぐに修行開始
じゃ」

○山の開けた平坦地

運動着に着替えた堅次郎が、準備体操をする。全身を入念にほぐす。体操を終えると、山道に入っていく。

○山道

堅次郎が歩いていく。
あっという間に息が上がり、汗が流れていく。

お凜様（声） 「よし、ちょっと走り込んでみるんじゃ」

堅次郎 「山で走るのはきつい」

お凜様（声） 「ええからやるんじゃ」

堅次郎が走り出す。

地面の悪い山道なので、走るといつ

も足取りは遅い。

堅次郎の息が激しくなる。



お凜様（声）「あそこの木のところで折り返そう」

堅次郎が木のところまで走って、折り返す。

堅次郎の足取りが遅くなっていく。

お凜様（声）「無理はいけん。歩くんじゃ。

転んだら落ちて死ぬぞ」

堅次郎が歩いていく。

○山の開けた平坦地

堅次郎が山道から出てくる。

お凜様（声）「一休みせい。息が整ったら変

身動作の特訓じゃぞ」

堅次郎がその場に座り込む。

回復するまでそのまま。

だんだん息が穏やかになり、水を飲

む。

お凜様（声）「よし、立つんじゃ」

堅次郎が立ち上がる。

お凜様（声）「足を半歩、肩幅くらいに開



け」

言われたようにやる。

お凜様（声）「両腕を腰に溜めて、突き出し、交差させよ」

言われたようにやる。

お凜様（声）「両腕を上から一回転させて、交差したところで、再び腰に溜めよ」

言われたようにやる。

お凜様（声）「両手を握って胸の前で交差して、五本の指を鉤爪のように曲げて開け。で、掌を外側に返せ」

言われたようにやる。

お凜様（声）「そのまま手を外側に平行に引いて、肩幅くらいで止めよ」

言われたようにやる。

お凜様（声）「そこから一気に手を合わせよ。これは仏への帰依を表す」

言われたようにやる。

お凜様（声）「最後に、中指と薬指を折り曲げて親指に合わせよ。で、手の小指側の側

面をくつつけるんじゃない。これは鬼の角じゃ
けえ、わしへの帰依を表す」

言われたようにやる。

お凜様（声）「ここで、締め、『特攻』と唱
えよ」

堅次郎「なんとなくわかった」

お凜様（声）「『特攻』と唱えると変身が発
動するけえ、とりあえず動作の練習を繰り返
返すんじゃない。ええか、仏への帰依とわしへ
の帰依が一番大事じゃぞ。そして形よりも
まずは心じゃ」

堅次郎「よし」

堅次郎が変身動作を繰り返す。

一回、二回、三回、四回、五回……

お凜様（声）「だいぶ様になってきたのう。

一度変身してみよ」

堅次郎「よし」

堅次郎が変身動作をする。

堅次郎「特攻！」

堅次郎が閃光に包まれ、一瞬にして白





衣の英雄『特攻戦士神風』に変身する。

堅次郎 「超級英雄『特攻戦士神風』只今参上！ 人世にはびこる悪者どもめ、正義の鉄槌で地獄に落ちろ！」

堅次郎が見得を切る。

お凜様（声） 「決まった！ 見事じゃ！」

堅次郎 「なんか恥ずかしいな」

お凜様（声） 「せっかく変身したんじゃ。戦

闘動作の練習もしよう」

堅次郎 「よし」

お凜様（声） 「自然体から、構え」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「上中下段突き」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「上中下段蹴り」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「肘打ち」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「膝蹴り」



言われたようにやる。

お凜様（声） 「手刀、裏拳、横蹴り」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「短刀構え」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「中段突き」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「上段払い、中段斬り」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「下段払い、中段斬り」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「下段斬り、中段斬り、上段斬

り、中段突き」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「拳銃構え」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「単発撃ち」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「連発撃ち」

言われたようにやる。



お凜様（声）「小銃構え」

言われたようにやる。

お凜様（声）「単発撃ち」

言われたようにやる。

お凜様（声）「連発撃ち」

言われたようにやる。

お凜様（声）「手榴弾構え」

言われたようにやる。

お凜様（声）「単発投げ」

言われたようにやる。

お凜様（声）「連発投げ」

言われたようにやる。

お凜様（声）「兄いは山歩きはよくやっ取る

が、基礎筋力が足りん。じゃけえ、最後

に筋力鍛錬もやろう」

堅次郎「これから筋トレ？」

お凜様（声）「プヨついた体をガチガチに

したいと思わんのか？」

堅次郎「したいけど……」

お凜様（声）「だったらやるんじゃ！」



堅次郎 「わかったよ」

お凜様（声） 「体幹支持」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「腕立て伏せ」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「上体起こし」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「下体起こし」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「背面反らし」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「大腿屈伸」

言われたようにやる。

お凜様（声） 「両腕重量挙げ」

言われたようにやる。

堅次郎 「もうだめ……。限界……。」

堅次郎が座り込む。

お凜様（声） 「今日の修行は終わりじゃ。あ

とは好きに遊んできてええぞ」
堅次郎 「ありがとう……。」



堅次郎がフラフラと駐車場に向かう。

○山の駐車場

堅次郎が車に戻ってくる。荷室から着替えを取り出し、公衆便所に向かう。

○山間の道路

王子の車が走ってくる。

○山の別の駐車場

王子の車が入ってきて停まる。

王子と騎士団が鞆を持って車から降りる。

騎士「おい、起きろよ」

騎士たちが父と母をひっぱたいて起こし、車から降ろす。

王子が荷室を開け、清子を降ろす。

王子「お城に着きましたよ。くれぐれも抵抗などしないように」

父母「清子！」



清子 「お母さん、お父さん！」

王子 「親子の時間はたっぷりありますから、お城に行きましょう」

王子と騎士たちが清子と父母を森の中に連れていく。

○山の森の中の平坦地

王子と騎士たちが清子と父母を連れてくる。

王子が鞆からビデオカメラを取り出し、録画し始める。

王子 「お座りください」

王子たちが清子と父母を突き放して座らせる。

騎士たちが取り囲んで短刀を突きつける。

父 「何が狙いなんだ！」

母 「馬鹿げたことはやめて！」

王子 「あなた方は姫の祝福者だ。そこで黙って見守っていただければよいのです」



騎士たちが父母の首筋に短刀を近づける。抵抗しようがない。

王子「姫、私の城へようこそ！ 緑あふれる

楽園で、忠実なる騎士団に囲まれ、幸せの

最果てまでお連れしましょう！」

王子が上着を脱いでネクタイを緩めだす。

清子「な、何する気？」

王子「お姫様ごっこですよ」

王子がシャツのボタンをはずす。

清子「こんなの、絶対違う……」

王子が清子の前に仁王立ちする。

ちょうど、王子の股間が清子の目前に

ある。ズボン越しでも固くなっている

のがわかる。

王子「姫、私はあなたを想ってこんなにも高

まっているのです。草むらの寝床に身を委

ね、我が愛を受け入れて下さい」

清子「誰が、あんたみたいのに……」

王子が清子をひっぱたく。



清子 「ああっ！」

父母 「清子っ！」

王子 「姫は躡が足りていませんね」

王子が清子を何度もひっぱたく。

清子 「ああっ、ああっ、ああっ！」

王子 「姫、せっかくご両親が祝福のために列

席しているのです。この白馬の王子の愛を

踏みにじるおつもりか」

王子がズボンのチャックを下ろす。

王子 「さあ、姫自らの手で、私の高まる愛

を慰めていただこう」

王子が清子の顔に股間を近づけていく。

清子 「白馬の王子なんかじゃない……けだ

ものよ……。けだもの以下よ……」

王子が清子をひっぱたく。

清子 「ああっ、ああっ！」

清子を蹴り倒す。

清子 「ああっ！」

父母 「清子！」



王子が清子にまたがって屈み、首筋に短刀を突き付ける。

王子「うるせえなあ。死にたくなけりゃ、とつとと股開けや。お？ 姫のくせにそんなこともできねえのか？」

清子「いや…、いや…」

王子「俺は闇の世界の芸術家だ。お前は俺の『お姫様ごっこ』の被写体として選ばれたんだ。世界中の金持ちがお前の晴れ姿を待ち望んでいるんだぞ。お姫様らしく、上品に、可憐に、快樂の絶頂を味わいやがれ」

清子の呼吸が荒くなっていく。

王子「俺のお姫様になれば無事に家まで帰れる。それが嫌なら、ここで熊の餌になる」

清子の呼吸がもっと荒くなっていく。

王子「答えは一つしかないと思うけどな」

王子が清子の頬に短刀をペタペタ押し付ける。

清子の呼吸がもっと荒くなっていく。

清子「命だけは、助けてくれるの…？」

王子 「紳士に嘘はありません」

清子は、屈辱で顔を歪ませながら、無言で首を縦に振る。

父母 「清子……」

王子 「さすがお姫様だ。実体験をもとに素晴らしい快樂の世界を描けるようになりますよ。究極の少女漫画が生まれるでしょう」

王子が清子に馬乗りになり、十字を切る。

王子 「父と子と精霊の御名において、永遠の愛欲を授からん。アーメン」

王子が清子の制服のスカートをほどき、前開きのファスナーを下げていく。

清子 「う……うう……」

清子の屈辱の表情。

○ 山道

堅次郎が歩いてくる。

写真を撮りながら散策を楽しんでいる





る。

すると、

清子（声）「あ、ああっ、いや、いやあっ」

清子の喘ぎ声が響く。

堅次郎が立ち止まる。

清子（声）「ああん、だめ、やめてっ」

堅次郎が周囲を見渡す。

堅次郎「誰かいちやついていやがるのか？」

清子（声）「いやああ、やめてえええ！」

堅次郎が狼狽する。

堅次郎「なんなんだよ？」

お凜様（声）「悪者の気配がするぞ！」

堅次郎「警察を呼ぼう！」

お凜様（声）「こんなところじゃ電波が通じ

ん！ 一時を急ぐ状況じゃぞ！ 変身する

んじゃ！」

堅次郎「よし！」

堅次郎が変身動作をする。

堅次郎「特攻！」

堅次郎が閃光に包まれ、一瞬で特攻戦



士神風に変身する。

お凜様（声）「こりゃ実戦じゃ！ 気をつけろ！」

堅次郎が護身用の特殊警棒を握りしめる。

清子（声）「ああっ、あっ、ああっ」
堅次郎が恐る恐る歩いていく。

○山の森の中の平坦地

堅次郎が草むらに身を隠す。
堅次郎の目に入ったのは、騎士たちに囲まれ、王子に乱暴されている清子の姿。

清子（声）「あ、ああっ、ああっ」

清子の喘ぎ声が響く。

堅次郎が怒りの表情で、特殊警棒を強く握りしめる。

堅次郎はスティールカメラを構えて犯行の証拠写真を撮る。

お凜様（声）「敵は複数じゃ。警棒で踏み込

んでも勝てん。拳銃を使え」

堅次郎 「こんな遠くから狙い撃ちできるのか？ あいつら只者じゃねえ。拳銃も持ってるはずだ……。外したら返り討ちだぞ」
お凜様（声） 「白い服の奴が頭じゃろう。他は従つとるだけじゃ。頭を倒せば命を懸ける理由はなくなるけえ、逃げ出すじゃろう」
う」

堅次郎 「白い背広なんて着やがって。白馬の王子気取りか」

堅次郎が草むらを這い回って移動する。

父と母の目の前で、清子は王子に辱められ続けている。

清子（声） 「あ、ああっ、ああっ」

清子の喘ぎ声が響く。

清子は制服を乱して、屈辱の表情で息を荒げている。

清子 「はあ、はあ、はあ……」

王子 「素晴らしい！ まるで天使を抱くよう



な心地にさせてくれる」

王子が十字を切る。

王子「主よ、姫君の操を奪うことをお許し下さい。アーメン」

王子が清子の下着を脱がそうとする。

清子「いやっ、いやああっ！」

清子の屈辱の表情。

その時、

堅次郎「うおおおお！」

堅次郎が草むらから飛び出して、王子を狙って拳銃を撃つ。

が、外れる。

清子の瞳に白衣の覆面男の姿が焼き付く。

父が、母が、王子が、騎士たちが、堅

次郎に注目する。

堅次郎「あ、いや……」

堅次郎が狼狽する。

王子「何者だ！」

堅次郎が震える。



堅次郎 「ちょ、超級英雄っ、『特攻戦士神

風』っ、只今参上！ 人世にはびこる悪者

どもめ、せ、正義の鉄槌でっ、じ、地獄に

落ちろ！」

堅次郎が見得を切る。

静まり返る。

王子 「ぶわっはっはっはっはっはっ！」

王子が噴き出して爆笑する。

騎士たち 「はっはっはっはっはっはっ！」

騎士たちも噴き出して爆笑する。

王子 「なんだよこいつ。頭沸いてんじゃねえ

の？ 腹痛え！」

堅次郎がオロオロする。

王子 「何かの冗談だろ？ こういう狂った奴

は……」

王子がビデオカメラの録画を止めて、

拳銃に持ち替えて、構える。

堅次郎 「あっ……」

王子 「追い払うしかないな！」

王子が堅次郎に銃撃する。





堅次郎 「うおっ」

銃弾が堅次郎の顔のすぐ脇を通り抜ける。

王子が連続して銃撃する。

堅次郎 「うおおおお！」

堅次郎が走って回避し、木の陰に身を隠す。

騎士たちが拳銃に持ち替えて、堅次郎を狙って銃撃する。

堅次郎は木の陰から動けない。

王子 「どこの馬の骨だか知らんが、飛んだ火に入る夏の虫とは、このことだな」

騎士のうち二人が、拳銃を構えて堅次郎に接近する。

王子 「どうにもならんぞ。諦めな」

堅次郎 「くそ……」

堅次郎が騎士二人に拘束される。

王子の目の前まで連れて行かれる。

王子 「飛んだ茶番劇だな。英雄にでもなったつもりか？」



王子が堅次郎の拳銃と短刀と特殊警棒
を奪い取る。
王子が特殊警棒を伸ばし、堅次郎を殴
りつける。
堅次郎「ぐあああっ」
特殊警棒で殴りつける。
堅次郎「ぐあああっ」
特殊警棒で殴りつける。
堅次郎「ぐあああっ」
特殊警棒で殴りつける。
堅次郎「ぐあああっ」
特殊警棒で殴りつける。
堅次郎「ぐあああっ」
特殊警棒で殴りつける。
王子の瞳に堅次郎の姿が焼き付く。
父と母が呆然としている。
騎士たち二人が堅次郎をその辺に転が
す。
王子「囚われの姫を救いに来た英雄の現実は
こうだ」



清子 「そんな……」

王子 「この愚か者をばらせ。場所を変えるぞ」

王子が清子を立たせて、拳銃を突きつけて片腕で拘束する。騎士たち四人が父と母を立たせて、拳銃を突きつけて拘束する。

王子が清子たちを連れて行く。

倒れている堅次郎が、かすかに両手の指を動かしている。

お凜様（声） 「兄い、しっかりしろ！ 諦め

るな！ 念じるんじゃ！」

堅次郎 「はあ……、はあ……」

堅次郎の鼓動が激しくなる。

残った騎士の二人が、倒れている堅次郎に近づく。

拳銃を向ける……。

その瞬間、

堅次郎 「うおおおっ！」

堅次郎の両手に拳銃が召喚され、倒れ



たまま騎士たちを思い切り銃撃する。

騎士たち「ぐああっ」

騎士たちが被弾して倒れる。

王子「なんだと？」

王子たちが動揺して足を止める。

堅次郎がよろよると立ち上がる。

王子「死に損ないめ！」

騎士たちが堅次郎に銃撃を浴びせる。

堅次郎が走って木の陰に身を隠す。

騎士たちのうち二人が接近して銃撃し

てくる。

堅次郎の呼吸が荒くなる。

騎士たちが迫ってくる。

堅次郎「うおおおお！」

堅次郎が騎士の一人に銃撃する。

騎士が被弾して倒れる。

もう一人の騎士が堅次郎を撃とうとす

る。

すぐさま騎士に銃撃する。

騎士が被弾して倒れる。

堅次郎が走って山の斜面の陰に身を隠す。

王子「やられたぞ！ 気をつけろ！」

残り二人の騎士たちが父と母に拳銃を突きつけたまま警戒する。

堅次郎が草むらに身を隠して這い回る。

騎士二人が銃撃してくる。

銃弾が堅次郎のすぐ近くをかすめる。

堅次郎が震えながら息を飲む。

王子「姿を現せ！ 下手なことしてみろ。お

前が助けようとしている娘の両親の脳味噌が弾け飛ぶことになるぞ」

堅次郎は草むらで潜んだまま。

お凜様（声）「姿を晒すな！ 撃ち殺される

ぞ！」

堅次郎「くそっ……、何かないか……」

王子「三つ数える。その間に姿を現せ」

堅次郎の呼吸が荒くなる。

王子「一つ！」





父と母の呼吸が荒くなる。

王子 「二つ！」

清子の呼吸が荒くなる。

王子 「三つ！」

父と母が絶望で目を閉じる。

清子が絶望で目を閉じる。

王子 「撃てえ！」

その時、

堅次郎 「うおおお！」

堅次郎が煙幕弾を投げつける。

王子 「なんだと！」

煙幕弾が爆発する。

白煙が立ち込めて王子と騎士たちの視

界を奪い、王子と騎士たちが咳き込

む。

堅次郎が白煙に突っ込み、騎士たちを

銃撃する。

騎士たちが倒れる。

王子 「この野郎、殺してやる！」

王子が拳銃を構える。

が、何も見えない。

堅次郎 「うおおおお！」

堅次郎が王子に銃撃する。

が、弾切れ。

王子に体当たりし、殴り飛ばす。

王子 「ぐあっ」

王子が倒れる。

王子が倒れているうちに、堅次郎が清子に手を差し伸べる。

清子が堅次郎の手を取り起き上がる。

王子がもがき苦しんでいる。

堅次郎 「逃げて！」

父と母が無言でうなづく。

堅次郎が清子の手を引いて逃げていく。父と母も逃げていく。

王子がよろよろと起き上がる。

王子 「うおおお！」

王子が堅次郎たちに闇雲に銃撃する。

父と母が被弾する。

父 「ぐあっ」





母 「あ あっ」

父と母が倒れる。

清子 「きゃあ ああ！」

清子が父と母に駆け寄ろうとする。

堅次郎 「だめだ！」

堅次郎が清子の手を引く。

父と母が起き上がる。

父 「平気かっ？」

母 「ええっ！」

父 「もはやこれまで！ 清子を頼む！」

母 「いや、だめ！」

父 「行け！」

父が母を引き離す。

王子が迫ってくる。

父 「特攻戦士神風と言ったな？ 私は武州西

部の名門武家『春小路家』の第二十九代当

主。春小路正隆だ。君が誰かは知らない！

娘と妻を救ってくれ！」

堅次郎 「あ……、は、はい！」

堅次郎が走って、母の手を取る。



清子のところまで走って戻る。

堅次郎 「今のうちだ！」

清子 「いやあああ！」

母 「あなたああっ！」

堅次郎が清子と母を連れて逃げていく。

王子 「さすが武家の当主。捨て身で姫たちの盾となるか」

父 「悪党め！ お前を討つ！」

父が素手で構える。

父 「うおおおおっ！」

父が王子に向かっていく。

王子が父を容赦なく銃撃する。

父 「ぐあっ！」

父が倒れる。

父 「頼んだぞ……」

父が動かなくなる。

王子 「無駄死にだな」

王子が歩き去っていく。

○山の尾根筋

堅次郎が清子と母を連れて逃げてくる。

山壁の陰に身を潜める。

清子「お父さん……、お父さん……」

母「うう……」

清子と母が嗚咽する。

堅次郎「お父さんは残念でした……。天晴れ
なご最期でした……」

母「あの人は、本物の武人でした……」

清子「うう……」

堅次郎「お母さん、大丈夫ですか？」

母「肩をかすただけです……。うっ！」

清子「お母さん！」

母が撃たれた肩を押さえて苦しむ。

堅次郎「ど、どうすれば……」

お凜様（声）「止血じゃ！ 汗拭きタオル

じゃ！」

堅次郎「そうだ！」

堅次郎が汗拭きタオルを母の肩に締め



付ける。

お凜様（声） 「鬼姫山の霊泉酒を使え」

鬼姫山の霊泉酒を召喚し、タオルの上から振りかける。

母 「ううっ！」

母の様子が落ち着いてくる。

堅次郎 「すごい効き目だ……」

堅次郎が下の様子を見る。

王子の姿は見られない。

堅次郎が清子にそっと寄り添う。

堅次郎 「動揺してるのはわかる。でも、気持

ちを落ち着けて。話せるようなら、話して

ほしい」

清子 「はい……」

堅次郎 「あいつはなんなんだ？」

清子 「白馬の王子の、偽物……」

堅次郎 「は？」

清子 「誘拐されたんです。白馬の王子を名

乗って。少女漫画の美男子の登場みたいな

感じで、ドキドキしちゃって」





堅次郎 「怪しいと思わなかったの？」

清子 「思った……。けど、神様の縁結びの効

き目が出たのかと思って……。神社にお参

りしてすぐだったから……。運命の人かも

しれない、演劇やってる人の求愛なのか

なって……。初めてのことだもの……。」「

堅次郎 「その、ごめん……。」「

堅次郎が清子から視線を少し反らす。

堅次郎 「君の、体が、狙いなのか？」

清子 「『お姫様ごっこ』って……。強姦ビデ

オを無理矢理……。あんな奴に、あんな奴

に……。」「

堅次郎 「それで……。無事だったの……。？」

清子 「うん……。」「

母 「この子があんなことされてたのに、何も

できなかつた……。」「

堅次郎 「あの状況じゃ、当たり前です……。」「

堅次郎が清子にぐっと近づく。

堅次郎 「俺は正義の味方だ。神様から英雄



警官でもねえ。格闘技を習ったこともねえ。中身はただの気の弱い男だ。少女漫画みたいな都合のいいお助けマンじゃないんだ……」

堅次郎が清子の目を見ながら、震えている。

堅次郎「あいつは必ず追いかけてくる。こんな山の中だ、誰も助けちゃくれない！」

清子が震えながら、堅次郎の目を見て、手を握る。

清子「頼れるのは、お兄さんだけ……」

堅次郎が息を飲む。

堅次郎「やるっきゃない！」

堅次郎は、清子と母を連れて走り出す。

○山の駐車場

王子が車に戻ってくる。

ドアを開けて、中から自動小銃と手榴弾を取り出す。



王子が再び山に向かっていく。

○山の窪地

堅次郎と清子と母が歩いてくる。

堅次郎「あいつは銃を持ってる。身を守れる

何かがあればいいけど……」

清子「ねえ、あれ！」

清子が指差す。

そこには、何故か拳銃と短刀が落ちて
いる。

堅次郎が武器を拾う。

堅次郎「いざというときは、これを使って」

清子が受け取る。

清子「こんなの、怖い……」

さらに、朽ちた名刺が落ちているのを
見つける。

堅次郎が名刺を拾う。名刺には「関東

脅征会 白馬組組長 白馬王子」と書

かれている。

堅次郎「あいつ、暴力団だ」

清子 「なんで名刺が？」

堅次郎 「落としたんだろう。ここが仕事場なんだ。強姦ビデオだけじゃなく、都合の悪い奴を消すためにも……」

清子 「これ、殺した相手の武器？」

堅次郎 「たぶん……」

清子 「お姫様になれば、家に帰すって言うけど……」

堅次郎 「犯行を知る奴を帰すと思うか？」

清子 「多くの女の子が、ここで……」

堅次郎 「今朝、ラジオのニュースで言っていた女子生徒の連続失踪事件、あいつの作業だ
と思う。野放しにはできない」

清子の鼓動が高鳴る。

母 「ううっ……」

母が撃たれた肩を押さえて苦しみだす。

清子 「お母さん！」

堅次郎 「止血はできたはず……」

母が倒れ込む。





母の体が震える。

お凜様（声）「しまった！ 毒じゃ！ 弾丸

に毒が仕込まれとったんじゃ！」

堅次郎「霊泉酒はっ？」

清子「え？」

お凜様（声）「弾を食らってからだいぶ経っ

とる！ もう毒が回っとる！」

堅次郎「一か八かだ！」

堅次郎が霊泉酒を母の傷に振りかける。

母「うっ、ううっ……」

母の体の震えが激しくなる。

母「うっ！」

母がぐったりする。

清子「お母さん！」

堅次郎「しっかり！」

母「はあっ……はあっ……」

母が息を振り絞る。

母「白い覆面のお兄さん……」

堅次郎「はい……」

母 「手当てをしてくれてありがとう……。でも、だめ、みたい……」

堅次郎 「そんなこと言っちゃ……」

母 「分かるの……」

堅次郎 「抗ってください……」

母 「私がいると足手まといになるわ……。置

いて行って……」

清子 「い、いや……」

堅次郎 「一緒に帰らないと……」

母 「お願い……。たった一人の私たちの子

を、無事に救い出して……」

清子 「いやあ……」

母 「清子、メソメソするんじゃありません

ん！ あなたは、平安時代から連綿と続く

春小路家の血を引く、正統な姫君なんです

よ！ 生き抜きなさい！」

清子 「ううっ……」

母 「短刀を置いて行ってもらえませんか……」

か……」

堅次郎 「はい……」



堅次郎が母に短刀を渡す。

母 「どこの誰かもわからないけど、あなたに
会えて良かったわ……」

堅次郎 「ありがとうございます……」

母 「行って……。あいつが来るわ……」

堅次郎 「失礼致します！」

堅次郎が一礼して、清子を連れて走っ
ていく。

清子 「お母さんっ！」

母が無念そうに、清子に手を振る。

王子が現れる。

王子 「毒の弾の味はどうだい？」

母が力を振り絞って起き上がる。

母 「夫の仇、討たせてもらうわ……」

震えた手で短刀を抜く。

王子 「少しでも長生きしたくはないのか

い？」

母 「おおおお！」

母が王子に突っ込んでいく。

王子は容赦なく母を銃撃する。





母 「う あっ」

母 が 倒 れ る 。

母 「清 子 ； ；」

母 が 動 か な く な る 。

王 子 「無 駄 死 に だ な」

王 子 が 歩 い て い く 。

○ 山 の 曲 が り く ね っ た 上 り 坂

王 子 が 歩 い て く る 。

王 子 「お お、 愛 し き 姫 よ、 汚 ら し い 下 郎 に 連

れ ら れ、 ど こ に お 逃 げ な さ っ た か？ 寂

し ゅ う ご ざ い ま す ぞ」

王 子 が 歩 い て い く 。

○ 山 の 尾 根 筋

堅 次 郎 が 清 子 を 連 れ て 高 台 に 身 を 潜 ま

せ る 。

お 凜 様 (声) 「敵 は 自 動 小 銃 を 持 ち 出 し お っ

た ぞ。 兄 い も 使 う ん じ ゃ」

堅 次 郎 が 自 動 小 銃 を 召 喚 す る 。



清子 「そんなのどこに持ってたの？」

堅次郎 「異空間」

清子 「え？」

堅次郎 「細かいことは気にするな」

堅次郎 が自動小銃を構える。

○ 山の曲がりくねった上り坂

王子が堅次郎に気付き、銃撃する。

○ 山の尾根筋

堅次郎が伏せて銃弾を避ける。

堅次郎が撃ち返す。

○ 山の曲がりくねった上り坂

王子が走って銃弾を避ける。

王子が撃ち返す。

○ どの山の尾根筋

堅次郎が伏せて銃弾を避ける。

堅次郎が撃ち返す。



○山の曲がりくねった上り坂

王子が走って銃弾を避ける。

堅次郎が連続して撃つ。王子が道を駆

け下りていく。

○山の尾根筋

堅次郎が追い撃ちをかけようとする。

が、弾切れ。

堅次郎「無限に撃てないのかよ！」

お凜様（声）「精力に応じて弾数が決まっ

とるのじゃ！休ませれば撃てるようにな

る！」

堅次郎「ややこしい！」

清子「なんでさっきから独り言を？」

堅次郎「神様との対話だ！」

堅次郎が自動小銃を捨てて拳銃に持ち替える。

堅次郎が清子を連れて道を駆け下りていく。



○山の曲がりくねった上り坂

王子が道を駆け下りつつ、振り返って銃を撃つ。

堅次郎と清子が物陰に避ける。

堅次郎が撃ち返す。

王子が走って逃げる。

堅次郎が撃ち続ける。

王子が走って沢筋の方に逃げる。

堅次郎が残弾を確認する。

残り一発。

堅次郎「君はここで伏せてるんだ」

清子「離れないで！」

堅次郎「一緒だとかえって危ない」

堅次郎が沢筋の方に向かっていく。

○山の沢筋

王子が走ってきて、堅次郎に自動小銃の連射を浴びせる。

堅次郎が物陰に避ける。

王子が追い撃ちをかけるが、弾切れ。
拳銃に持ち替える。

堅次郎が飛び出して突っ走る。

王子が拳銃を連射する。

堅次郎が物陰に避ける。

王子が物陰に逃げ、拳銃の残弾を確認する。

残り一発。

堅次郎が走ってくる。

堅次郎が拳銃を構えながら、周囲をうかがい、歩き回る。

物陰から王子が堅次郎を狙って拳銃を構えている。

王子が飛び出して堅次郎に拳銃を突き付ける。

堅次郎は身動き取れない。

王子「怪しい野郎め。俺の邪魔をしやがって。娘を渡せ！」

堅次郎「断る！」

王子「なら死ね！」



王子が堅次郎の胴体を撃つ。

堅次郎 「ぐあっ！」

堅次郎が被弾して倒れる。

○山の曲がりくねった上り坂

堅次郎が撃たれる様子を見て、清子が

絶句する。

清子 「お兄さん……」

○山の沢筋

王子 「どこの作業服屋で作ったのか知らねえ

が、右翼だか左翼だか暴走族だかわから

ん格好しやがって。どこから見ても不審者

でしかねえ」

王子が堅次郎に背を向けて歩き出す。

だが、堅次郎が、倒れたまま拳銃を王

子に向ける。

堅次郎が拳銃を撃つ。

王子 「なっ！」

銃弾は王子から外れる。





堅次郎がゆっくり起き上がる。

王子「なぜ平気なんだ？」

堅次郎「特攻戦士神風は、超人的耐久力を発揮できる……」

○山の曲がりくねった上り坂

清子が堅次郎の方に駆け下りていく。

○山の沢筋

堅次郎と王子がにらみ合っている。

王子「俺は白馬の王子だ。白衣の英雄など認めねえ」

王子が銃を捨てて短刀を抜く。

堅次郎「お前が認めなからうが、俺は神様に選ばれている」

堅次郎が銃を捨てて短刀を抜く。

堅次郎と王子が短刀を構える。

堅次郎が呼吸を荒げて震えている。

王子「怖いのか？」

堅次郎「怖いさ！」



お凜様（声） 「兄い、わしが付いとる！ 己

を信じよ！ こいつを討て！」

堅次郎が全身に力を入れて震えを抑え
る。

王子 「うおおおっ」

王子が斬りかかる。

堅次郎が避ける。

堅次郎 「うおおおっ」

堅次郎が斬りかかる。

王子が避ける。

王子が連続で斬りかかる。

堅次郎が避けて、斬りかかる。

王子が避ける。

堅次郎が斬りかかるが、王子に斬りつ

けられる。

堅次郎の顔が引きつる。

堅次郎が斬りかかる。

王子が堅次郎の腕を取って、絞めつけ

る。

堅次郎の手から短刀が落ちる。



王子が堅次郎に頭突きし、何度も膝蹴りする。

堅次郎が崩れ、王子が堅次郎を蹴り飛ばす。

王子「おい、立てよ」

堅次郎が倒れて苦悶する。

堅次郎がよろけながら立ち上がる。

堅次郎が拳を構える。

堅次郎「うおおおっ」

堅次郎が王子に殴りかかる。

王子が避けて殴り返す。

王子が堅次郎の腹を何度も殴り、顔面に膝を叩き込む。

堅次郎が崩れてもがく。

王子が堅次郎の様子を見ている。

堅次郎が立ち上がろうとする。

王子が堅次郎を蹴り飛ばす。

堅次郎が立ち上がろうとする。

王子が堅次郎を蹴り飛ばす。

堅次郎が倒れて這いつくばる。

王子「かっこ悪いな。神に選ばれた英雄が呆れるぜ」

堅次郎が立ち上がろうとする。

王子が堅次郎を蹴り飛ばす。

堅次郎が倒れてうずくまる。

堅次郎「ううう……」

王子「お前の無謀を讃えて、名誉の斬首を与えよう」

王子が屈んで堅次郎の首筋に短刀を突き刺そうとする。

その瞬間、

清子「いやあああっ！」

清子が突っ込んできて、王子に銃撃を

浴びせる。

王子「うぐあっ！」

王子が被弾して倒れる。

清子が拳銃を握りしめたまま興奮している。

堅次郎がよろよろ立ち上がる。

王子がよろよろ立ち上がる。





堅次郎 「うおおおっ」

堅次郎が王子に拳を何度も叩き込み、

何度も膝を叩き込む。

王子が持ちこたえたところ、堅次郎が

蹴り込む。

王子が蹴りを受け止め、蹴り返す。

王子が堅次郎に拳を次々叩き込む。

堅次郎が苦悶する。

王子がすかさず短刀で斬りつける。

堅次郎が転がるように倒れる。

堅次郎の変身が解けて、生身になる。

お凜様（声） 「耐久力の限界を超えてしまう

た！」

堅次郎が立ち上がれない。

王子 「中身はこんな冴えない野郎だった

か！」

王子が短刀を構えて堅次郎に迫る。

王子 「世の中には二種類の男がいる。美し

い者と。醜い奴。醜い奴は、美しい者の隆

盛を尻目に淘汰される宿命にある。この白



馬の王子に盾突いたことを悔いて、無様に腐り果てるがいい」

堅次郎が起き上がれない。

王子が短刀を突き刺そうとする。

その瞬間、

清子「いやあああ！」

清子が王子に銃撃する。。

王子「うぐっ」

王子が被弾して倒れる。

が、すぐに起き上がってくる。

王子「この小娘え……」

清子「いやっ……いやっ……」

清子が後ずさりする。

堅次郎が力を振り絞って立ち上がる。

王子が短刀を構えて清子に迫る。

堅次郎が落とした短刀を拾う。

王子が清子に迫る。

堅次郎「うおおおっ！」

堅次郎が短刀で王子を突き刺す。

王子「ぐああっ」



王子を突き刺す。

突き刺す。

突き刺す。

王子「野郎……」

王子が堅次郎に向けて短刀を振り上げる。
る。

堅次郎「うおおおっ！」

堅次郎が王子を短刀で叩き斬る。

王子「ぐああっ」

王子が倒れる。

堅次郎が短刀を構えて様子を見る。

王子が突っ伏して動かなくなる。

堅次郎「世の中には二種類の男がいる。神に

好まれる者と、神に嫌われる奴」

堅次郎がよろよろと清子の方に歩み寄る。
る。

清子「お兄さん！」

清子は、堅次郎を抱き留める。

堅次郎「帰ろう……」

堅次郎は、清子を連れて歩き出す。

その時、王子が起き上がり、隠し持っていた手榴弾を取り出す。

王子 「お姫様を吹っ飛ばしてやるうううっ」

王子が手榴弾を投げつける。

手榴弾が飛んでくる。

啞然とする堅次郎と清子。

手榴弾が落ちる。

堅次郎がとっさに拾って、投げ返す。

王子の目が引きつる。

王子 「うおおおっ！」

手榴弾がありえないくらいの大爆発を

し、王子を吹っ飛ばす。

堅次郎と清子が爆風を逃れて飛ぶよう

に伏せる。

静まると、仰向けの清子に堅次郎が覆

い被さるように伏せている。

堅次郎 「大丈夫？」

清子 「うん……」

堅次郎と清子は、とても、近い。



○山の駐車場

堅次郎が清子連れて歩いてくる。

車まで戻ってきて、清子を助手席に乗せてから、運転席に乗り込む。

○堅次郎の車の中

堅次郎が携帯電話を取り出す。

堅次郎「やっぱり圏外だ。通報できない」

携帯電話を車のホルダーに固定する。

堅次郎「警察署まで送るよ。後のことは任せ

よう……」

清子「うん……」

堅次郎「うぐっ……」

清子「大丈夫？　運転できる？」

堅次郎「やってみる……」

堅次郎が霊泉酒を飲む。

清子「まだ、ちゃんと自己紹介してなかったね。私、春小路清子。通信制の高校生。少女漫画を描くのが好き」

堅次郎「人間原堅次郎。しがない元運転手の





現警備員だ……。実家を出て持ち家に住んでるが、週五で働いても給料が安すぎてどうしようかと思ってる」

清子「職業や給料なんてどうでもいい。あなたこそ、私にとっての白馬の王子様よ」

清子が堅次郎と固く手をつなぐ。

清子「お兄ちゃん！」

清子が堅次郎に顔を近づける。

清子の微笑がまぶしい。

清子「すべては、神様のお導き」

清子が堅次郎に唇を捧げる……。。

○山の駐車場

堅次郎の車が走り出す。

○山間の道路

堅次郎の車が走っていく。

○山の遠景

雄大な秩父山地が広がっている。



○ 漫画原稿

清子描き下ろしの大活劇少女漫画『特攻戦士神風／神様の縁結び』の原画が
写し出される。

終幕主題歌「神様の縁結び」

歌・春小路清子

○ 街の路地裏

ジミーが歩きながら酒を飲み、酔っ払っている。

変な鼻歌でいい気分な様子。

その辺の壁際で立小便を始める。

小便を終えて、またフラフラと歩きだす。

遠くに、誰かが立っているのが見える。

誰かの影が近寄ってくる。

ジミー「おい、俺になんか用か？ 誰だよお前は？」



誰かの影が近寄ってくる。

街灯に照らされたのは、白衣の覆面

男。それは堅次郎が変身した特攻戦士

神風。

ジミー「この野郎！ 怪しい奴め！」

ジミーが短刀を抜く。

堅次郎が刀を抜き放つ。

堅次郎「特攻戦士神風参上！ 神に代わって

お前を斬る！」

ジミー「や、やめろ！ 金ならやる！ 話し

合おう！」

堅次郎「問答無用！」

堅次郎がジミーを斬る。

ジミー「ぐあっ」

ジミーが倒れる。

お凜様（声）「地獄に落ちることが決まっ

る奴じゃ。気にせんでええ」

堅次郎が歩き去っていく。

○ 黒画面



短編映画「特攻戦士神風／神様の縁結び」

謎の男（声）「白馬の王子が殺られたのだと。
『お姫様ごっこ』は世界中で大人気だ。損
害は大きい。関東脅征会を敵に回したらど
うなるか教えてやれ。男も女も必ず消せ」

完